

# CData Connect AI (体験デモ紹介)

株式会社ニューコム

## 【目的】

CData Connect AI の体験を通じて、  
貴社の経営判断・現場改善における  
AI 活用の具体イメージを掴んでいただく

## 【本日の流れ】

1. AI活用の進展と企業に求められる変革
2. AI とデータをつなぐ課題
3. MCP (Model Context Protocol) とは
4. CData Connect AI のご紹介
5. デモ実演
6. QA・自社活用ディスカッション

## 【AI活用のフェーズは次の段階へ移行している】



## 【多くの企業が直面している課題】

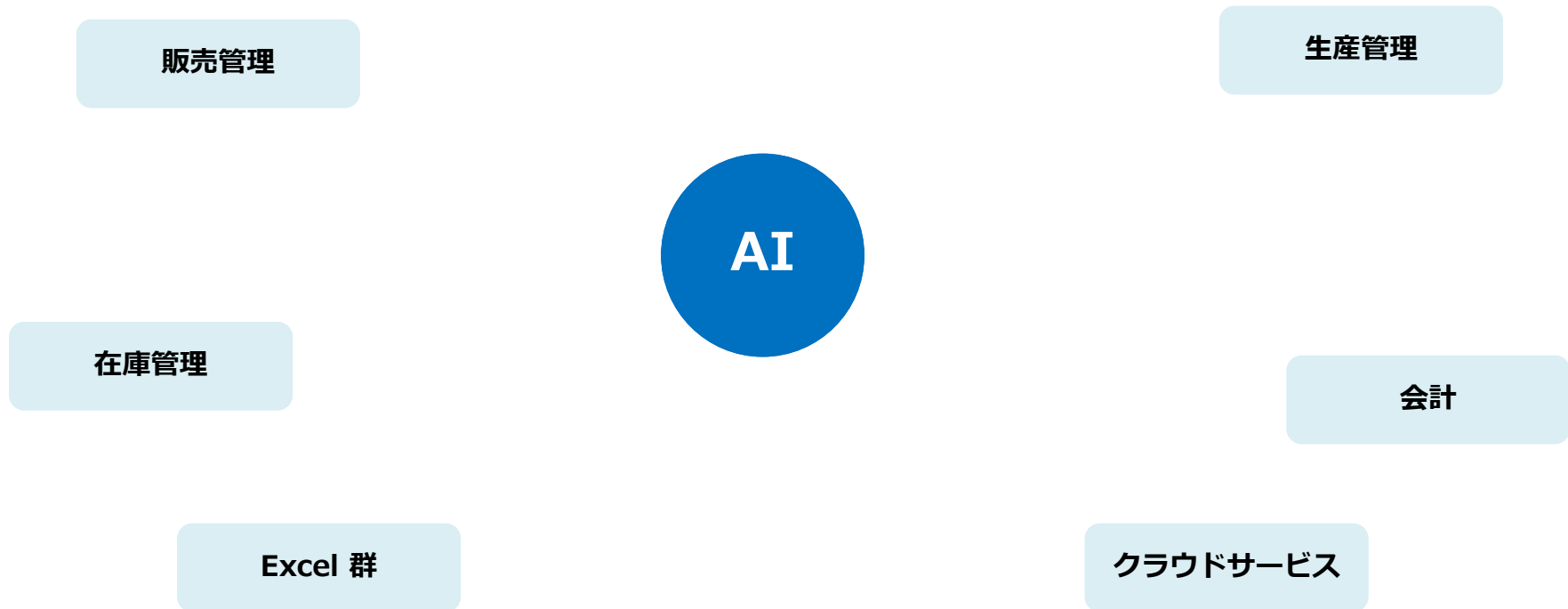
- 社内のデータを AI にどう接続するか
- 現場で使えるツールにどう仕立てるか
- 経営判断にどう活かすか



貴社内にPoCへ進むための環境を作りましょう

## 【AI を業務で活かすには、自社データとの接続が不可欠】

ChatGPT 等の汎用 AI は「会社の情報は持っていない」  
自社データと結びつけて、初めて業務価値が生まれる



→ AI と業務データをつなぐ仕組みが必要  
その仕組みが **MCP** です

## 【AI とデータソースをつなぐ共通プロトコル】

- Anthropic が開発、オープンソースとして公開
- AI は共通の作法で、MCP サーバー経由でデータソースを扱える

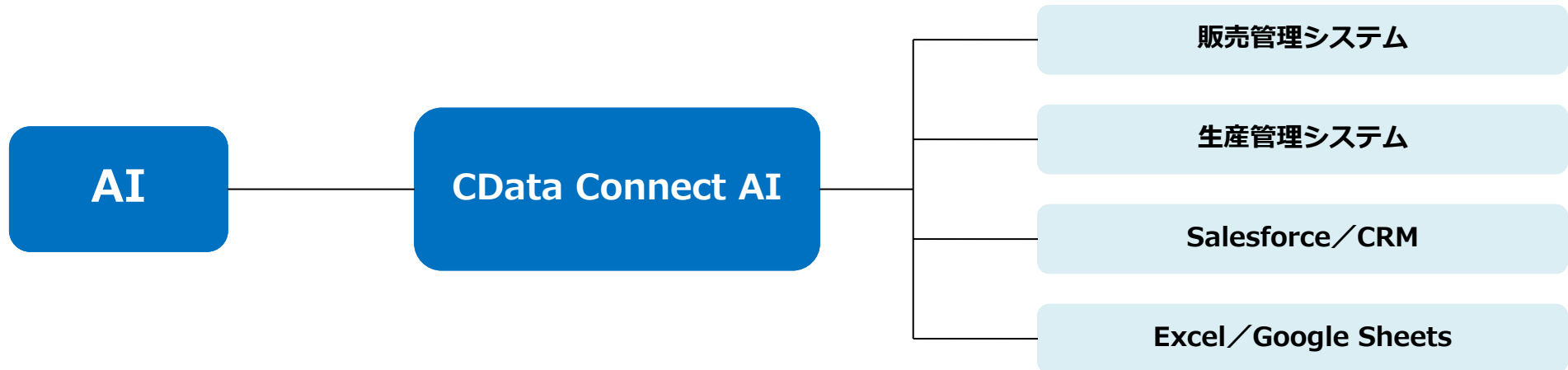


※ MCPサーバーは対応するデータソースごとに必要

## 【CData 社が提供する MCP サーバー】

- 1つで 350 種以上のデータソースに対応
- 権限統制機能を標準装備

※[データソース一覧](#)



## 【見ていただきたいポイント】

- ① Connect AI で複数のデータソースを横断する
- ② 経営判断に寄与する分析を行う

## 【環境】

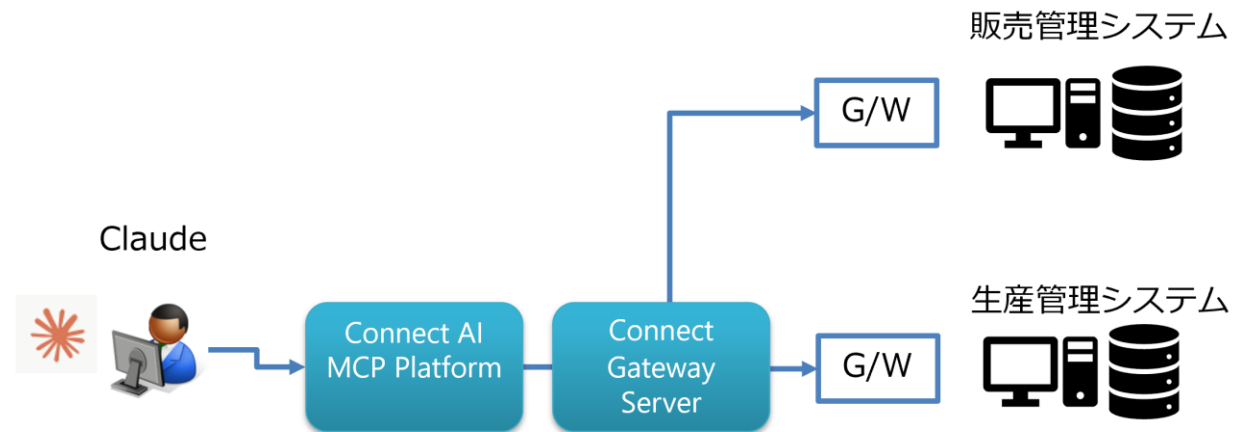
Claude Desktop + CData Connect AI

## 【接続先】

販売管理DB ([DemoConnectAI\\_Sales](#))

生産管理DB ([DemoConnectAI\\_Production](#))

※ いずれも SQL Server 上





## 【AI 活用の成果は "接続" だけでは生まれない】

業務データを活かすには、AI に渡せる形に整理された業務プロセスが必要となる

## 【ニューコムができること】

ニューコムは Connect AI のご紹介だけでなく、業務フローの整理・構造化までITコンサルティングが可能です

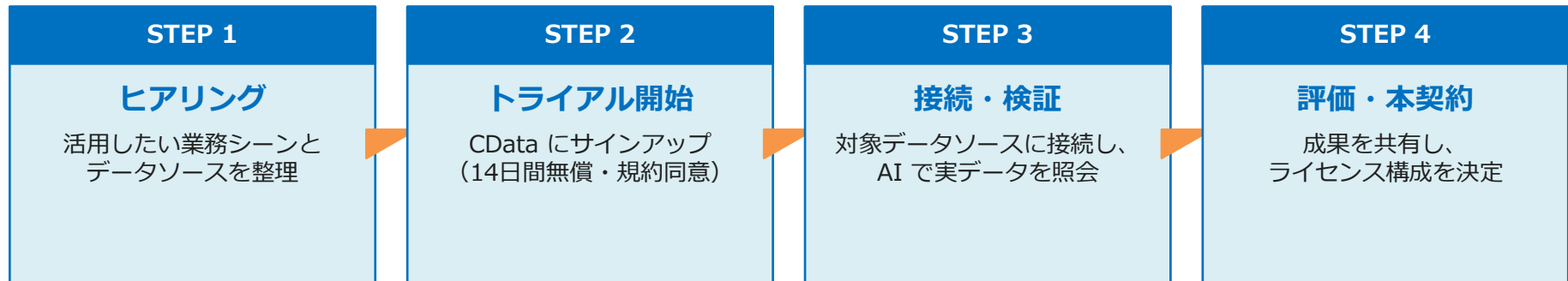
---

本日のデモを踏まえて、貴社での活用イメージをお聞かせいただければ幸いです

【まずは「14日間無償トライアル + 伴走 PoC」で試せます】

<p>トライアル期間</p> <p><b>14</b> 日間</p> <p>CData 社の標準提供</p>	<p>トライアル費用</p> <p><b>0</b> 円</p> <p>ライセンス無償・規約同意のみ</p>	<p>アカウント開設</p> <p><b>3</b> 分</p>
--	--	----------------------------------

【進め方：4ステップ】



※接続構成によって事前準備が必要となりますので、STEP2の前に弊社へご相談ください

## 【AI に基幹データを見せても大丈夫？ - 4つの統制でガバナンスを担保】

### ① ユーザー権限・ロール

- Administrator / Query User の2ロール
- データソース単位で権限付与 (Select/Insert/Update/Delete)
- 操作ごとに「誰が・何を」見られるかを制御

### ② 認証情報・SSO 連携

- Shared / Per-User Authentication を選択
- Per-User では各ユーザーが自身の資格情報で接続
- 接続元システムの権限はそのまま (Entra ID 等 SSO 対応)

### ③ 監査ログ・クエリログ

- Query Log : 実行クエリ・ユーザー・時刻・結果を記録
- Audit Log : ユーザー追加・権限変更等の管理操作を記録
- ログは7日間保持 (長期保管は外部出力で対応)

### ④ データマスキング・パススルー

- 認証情報は CData 側に暗号化保管
- AI はパススルー権限で取得 - 権限外データは不可視
- ソース側で列マスキング設定があれば AI 側にも反映

Point : 既存のセキュリティモデル (SSO/RBAC/列権限) を尊重しつつ、AI 利用を「監査可能」な形に置く

点線で囲んだ範囲（ETL ~ BI）に求められてきた作り込みが、Connect AI + AI で軽減される

## ETL~BI（現構成）

基幹システム

ERP

SCM

CRM

ETL ~ BI の領域

ETL

ETL

ETL

データウェアハウス (DWH)

データマート

BIツール

## Connect AI + AI（新構成）

基幹システム

ERP

SCM

CRM

Connect AI + AI に集約

CData Connect AI

350+ データソース / 権限統制

AI (Claude Desktop 等)

Point : 従来必要だった ETL・DWH・データマート・BI の作り込みが Connect AI + AI で軽減され、現場や経営層が直接データを活用できる場面が広がる

## 【BIで作り込むほどでもなく、現場で Excel に頼ってきた業務がターゲット】

1. 基幹システムから CSV をダウンロードして手作業で結合
2. VLOOKUP・SUMIFS を駆使したピボット集計
3. 経営会議前の手集計・Excelレポート作り
4. 「ちょっとこの数字出して」依頼への都度対応
5. 担当者にしか触れない属人化マクロ

これらを Connect AI が  
対話形式で肩代わり